

# 評書

## 『決済システムのすべて』

中島真志・宿輪純一 著

決済システムに対する理解不足を払拭



決済システムは、現代の経済活動を支える最も重要なインフラの一つであるといえよう。しかし、その存在は、あくまでも舞台裏を支える黒子とみなされており、表面立って取り上げられ議論されることは、これまで少なかった。たとえば、いくつかの代表的な金融論のテキストをみてもそのほとんどにおいて決済システムに関する記述は、その役割に比してあまりに乏しいことにあらためて驚かざるをえない。

こうしたことから、一般的にも決済システムに関する認識や理解が不足しているのが、わが国の偽りない現状であろう。ところが、そうしたわが国一般の無理解のなかで、世界の決済システムは、情報技術の進展を追い風に近年急激な変革と進化を実現しつつあり、日本の金融は、決済システムの面でも世界に後れをとる状況に至っている。もはや、決済システムの重要性に關しての認識不足は、大目にみられることではなく、無知は、わが国の競争力その他に実際的な損害を与えていることにつながるといえる。許されないと悟るべきである。こうした状況において、われわれの蒙を啓くべく、格好のタイミングで出版されたのが、本書である。

本書は、著者たちが「決済の基本書」を目指したとして、本書は、著者たちが「決済の基礎知識や理論を平易に解説しており、決済システムを体系的に理解するうえで、きわめて有用な書物に仕上がっている。これまで、こうした書物がなかったことが認識不足の一因ともいえることから、本書の意義は大きく、決済システムに関する無理解を払拭し、的確な認識を形成するために、広範囲の読者に本書を薦めたい。

内容的には、第一章から第四章にかけて、まず決済システムのプロセスや決済リスク、ネット決済システムとRTGSシステムの相違などがわかりやすく説明されたあと、決済システムのトレンドとその背後にある要因が解説される。第五章から第八章で、アメリカ・カナダ、欧州、日本の決済システムにおける最近の改革の動きや新しい次元の決済システムである「CLS銀行」について詳しく紹介されている。

そして、最後に第九章で、今後の決済システム改革の方向性や、クリアリングバンク、決済専門銀行などの新しい動きについて述べている。その際、本書には、図表がふんだんに盛り込まれ、さまざまな決済システムの全体像がビジュアルに把握できるよう工夫されている。

著者は、中央銀行業務にバックグラウンドをもつ中島氏と都銀での決済の実務・企画の経験豊富な宿輪氏との二人であり、両者のこれまでの研究成果や実務経験が融合したことが、本書のような書物の執筆を可能にしたと考えられる。さらに、執筆にあたっては、海外の中央銀行や決済システムの運営主体、有力行などでの詳細な調査が行われており、そうした努力には敬意を表したい。

本書は、その内容から、いわば「決済システム白書」と評価できる。それゆえ、欲をいうと、今後とも毎年あるいは隔年ごとには、内容のアップデートを図ってほしいものである。そうした作業は、著者たち個人の手だけでは荷が重いかとも懸念されるが、これだけ変化が急速ななかにおいては、継続的な改訂は本書の意義を維持するうえで不可欠だと考えられる。

(著者の中島氏は金融情報システムセンター調査企画部長、宿輪氏は三和銀行決済業務部長代理。東洋経済新報社刊・A5判、三一〇ページ・本体三二〇〇円)